

千畳閣の金箔瓦

宮島の塔之岡に建つ豊国神社本殿（重要文化財）は、その壮大な規模から俗に千畳閣と呼ばれています。現在、千畳閣の屋根を見上げると金箔で飾られた瓦を望むことができますが、これは昭和 60 年（1985）から平成元年（1989）にかけて実施された修理工事によって甍った姿です。

そもそも、屋根に金箔を押した瓦を葺くようになるのは、織田信長が天正 4 年（1567）に築城を開始した安土城（滋賀県近江八幡市）が最初で、その後、豊臣秀吉へと引き継がれていきます。信長の時代に金箔瓦を使っていたのは信長とその子息の城館に限られていましたが、秀吉の時代になると、秀吉の城館のみならず秀吉と関係の深い有力大名の城館や寺社なども金箔瓦で飾られるようになります。

千畳閣は、天正 15 年（1587）に秀吉の命により大経堂として建立が開始されたものですが、建築途中の慶長 3 年（1598）に秀吉が死去したため、未完のまま工事が中断されたと伝えられています。鬼瓦に残された銘文からは、播磨国・英賀（兵庫県姫路市）の瓦工によって製作されたことが確認でき、これは秀吉から提供された技術者集団であったと考えられます。壮大な建物を金箔瓦で荘厳にすることにより、瀬戸内海を往来する人々に豊臣政権の威光を示威する目的があったようです。

千畳閣にかつて金箔瓦が葺かれていたことは、明治維新以降は不明確になっていたようですが、大正時代の修理の際に金箔の痕跡が確認されたため、昭和 60 年からの修理工事では金箔を押す修理が行われました。金箔の接着剤には朱漆が使われており、これは金箔を美しく輝かせる効果があります。近年の各地の城館遺跡の発掘調査によっても、秀吉の時代の金箔瓦の下地に朱漆が確認されています。

漆そのものは非常に強固な物質ですが、紫外線に弱いという弱点があります。そのため修理工事から二十年以上を経過した現在では、金箔や漆がところどころ剥がれてきています。金箔瓦を復元する際には、その華麗さは千畳閣には似つかわしくないのではという意見もあったようですが、時間とともにすっかり落ち着き、宮島の景観に溶け込んでいるように思います。

（鈴木 康之）

（「宮島学センター通信」第 7 号・2016 年 3 月）



天正 17 年（1589）銘のある北西隅の鬼瓦
（写真撮影は新谷孝一氏）